
波動を放つ鼬

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

波動を放つ鼬

【Nコード】

N2866B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

少年は小さな頃から不思議な能力を身につけていた。それは、生き物の“波動”を感じ取れる事だった…。少年はある日、毎朝の日課をこなしている山に異変を感じた。急いで近付くと何と山火事が発生していた。少年は入山し、火を食い止めようとした。その時、少年は眩い光に包まれた。少年が目を開くと何物かが光りつつ波動を放っているのを感じた。少年はゆっくり光へと近付く…。少年が持つ不思議な能力が今、強き波動を掴む！

（前書き）

お読み下さりありがとうございます。

難しい漢字がタイトルや本文に使用していますので出来るだけルビをふってありますが、書いてない所もあると少々あると思いますがそこはご了承ください。

鼬は“いたち”と読みます。あの動物のイタチです。

自信は無いですが、真面目に作成した作品です。それでは、どうぞ。

僕は、昔から不思議な能力ちからを持っていた。僕が今、住んでいる周りの豊かな自然環境が、僕にその力を与えてくれた…

僕は、生きとし生ける全てのモノが放つ“波動”を感じ取る事ができるのだ。例え、小動物や蟻ありからでも波動を感じ取れる。

僕は、波動を感じ取る事で、自然で生きる生き物の生命いのちの奥深さを理解する。

僕は小さい頃から毎朝早い時刻に裏山に入り、生き物の波動を感じ取るため歩き回っていた。元々この山は、神聖な場所として地元住民から崇められていた。

僕は、この聖なる山へ自分の精神力を高めるため毎日入山していた。

この神聖な山に異変を感じたのは昨日の夜からだった。日付が変わった夜中に、僕は妙な胸騒ぎを感じた。僕は家族を起こさずに静かに家を出て、裏山に向かった。

裏山の近くに来ると周りが暑く感じ、上をみると山の頂上が赤く光っているのが見えた。僕は直感した、山火事だと…

僕は恐れていた事があった。

実は数ヶ月前にこの山を崩して更地にし、マンションや住宅地にしようと計画している不動産会社が僕の町に現れた。当然、地元住民は猛反発し、不動産会社をこの町から追い出そうと今でも不動産会社側と交戦していた。その事で、不動産会社側が話し合いを放棄して山を消そうと、実力行使に出る事だった。

それが現実としてたった今、目の前で起きているのだ…

僕は、気が動転して何をすれば良いか解らず、気が付けばバケツを持って無我夢中で山に入っていた。

山の奥へ入っていく途中、野鳥や狸などの小動物達が炎から逃げるために麓へ向かっているのが見えた。僕は落ち着きを取り戻し取りあえず一安心し、炎が舞う中を走って山頂へ急いだ。

しかし、炎の勢いが一層に増し、山頂付近から到底行けない状態だった。僕は進行を諦め、即座に山頂近くの湧水からバケツに水を酌み消防が来るまで消火しようとしたその時だった…

一瞬にして周りが見えなくなり、僕はゆっくり薄目を開けると向こうに蒼白い光が見えた。僕はゆっくりとその光のもとへ近付いた。近づく程にその光は最大級の波動を放っているのが解る。僕はしっかりと目を開け、その光を見据えた。波動の光を放っている正体は見て、僕はひどく驚いた。

何とそれは、小さな鼬なのだ。しかも、全身が澄んだ碧色^{みどり}に輝いていて強い波動を放っていた。

その強い波動は僕の精神力に衝撃を与えていた。僕は気付かない内に、そのあまりの凄さに我を忘れ、見入ってしまった。

興味津々の僕は、更に鼬に近付こうとしたその時…また眩く強い光に襲われ、気を失った…

「おい、ボウズ…大丈夫か？」

「う…う、うん…？」

あれからどれくらいの時間が経ったのだろうか。気が付くと僕は山の麓にいた。

「良かった…気が付いたか。消火活動していた時、山奥で炎の中に倒れているお前さんを見つけて急いで麓へ運んできたんだ。」

そうか…僕は倒れていたんだ…。あ、そうだ！あの鼬は？あの鼬はどうなったんだ？！

「あの、僕が倒れていた近くに光った鼬を見ませんでしたか？！」
消防士は聞いた途端に笑いだし、ゆっくり言った。

「お前さん、光る鼬なんてこの世にいると思うか？」

「でも、いたんだ！碧色に輝く鼬が…」

しかし、結局僕の話は誰も真面目に聴いてくれず、僕もそれは自分の心の中にしまっておく事にした。

あとから聞いた話では、あの時消防が山に入った時には火の勢いが弱くなっていたらしく、倒れていた僕も火傷せずただ気絶していただけだったという。

そして、程なくして放火の実行犯が捕まり、犯人が不動産会社と繋がりがあったため、不動産会社はこの町をひっそりと去っていった。

今でも思う。あの鼬は山の神様が姿を変えていたもので、強い波動を放って山火事を最小限に留めてくれたんだ、と。

僕はあの出来事が起きてからも毎朝、裏山に入山して山の神様へ崇拜しつつ、自らの精神力を鍛え続けている。

（後書き）

お読み下さりありがとうございました。この作品の評価又は感想を、頂けたら嬉しい限りです。他の作品も是非、御覧下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2866b/>

波動を放つ融

2010年12月22日02時13分発行